

第1章 甲賀市の概要

1. 自然環境

(1) 位置・面積

本市は、滋賀県の東南部、近畿圏と中部圏の中間に位置し、東から南にかけては三重県に、南西部は京都府に、北西部は^{おおつ}大津市、北部は^{りつとう}栗東市・^{こなん}湖南市・^{りゅうおう}竜王町・^{ひの}日野町・^{ひがしおうみ}東近江市に接している。

東西に約43.8キロメートル、南北に約26.8キロメートル、面積481.62平方キロメートルで県面積の約12パーセントを占めている。

(2) ^{こうか}甲賀の地名の由来

甲賀の地名は古く、『日本書紀』の中に百済系豪族「^{かふかのおみ}鹿深臣」の記述があり、すでに6世紀末には、この地が「かふか」あるいは「かうか」と呼ばれていたと考えられている。奈良時代には、「かうか」に縁起の良い漢字をあてて「甲可」や「甲賀」と記していたが、やがて「甲賀」に定着し、近江東南部に広大な面積を占め、「甲賀郡」と呼ばれる近江の国を構成する一部であった。

「甲賀」は、千年以上の時を経て、平成16（2004）年に水口、土山、甲賀、甲南、信楽の5つの町が合併し成立した新しい市の名称にも引き継がれている。「甲賀」の近世の村名の多くはこれら旧5町の大字名として残っている。

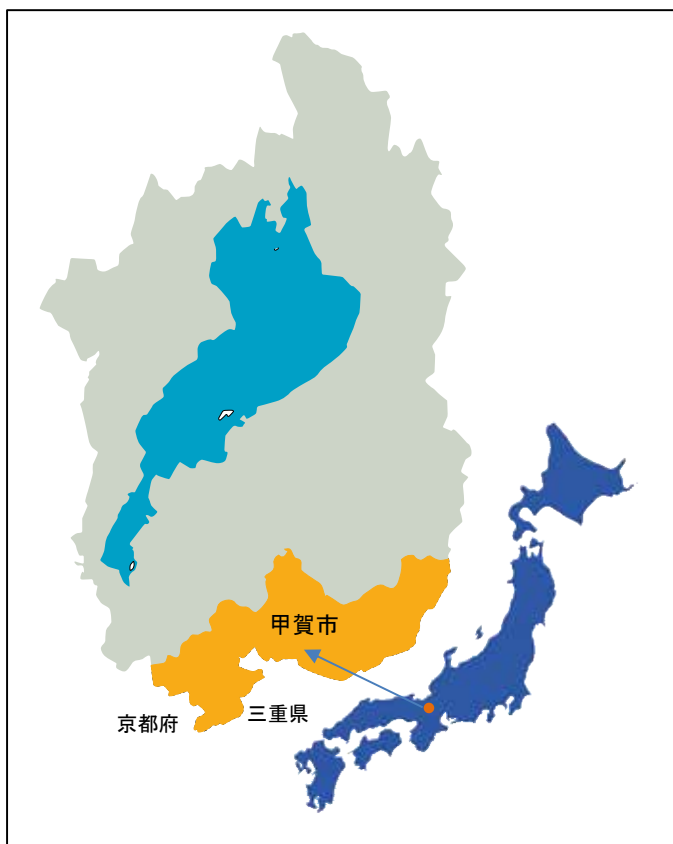


図1-1 甲賀市の位置



図1-2 甲賀市の旧5町

(3) 地形・地質

本市は、森林が約7割、農地が約1割を占める自然環境に恵まれた地域である。東部は標高1,000メートルを超える山々が連なる鈴鹿山脈が望め、中央部から南西部にかけては小高い丘陵と標高500～700メートルの信楽山地が続いている。鈴鹿山脈を水源とする野洲川とその支流である杣川が流れ、複雑に入り組んだ谷を形成し、野洲川と杣川の合流するところには平野が広がり、南西部では大戸川沿いに盆地が形成されている。また、この緑豊かな山々は琵琶湖の水源涵養※や水質保全に重要な役割を担っている。

東と西に高い山があり、その間になだらかな丘陵や平野が広がる本市の地形の形成には、山地をつくる中・古生層の固い岩、火山のマグマによってつくられた花崗岩類、海の貝の化石が出る鮎河層群、ゾウの足跡化石で知られる古琵琶湖層群など本市の特徴的な地質が反映している。東側の鈴鹿山脈は主に固い泥岩やチャートなどの岩石や鮎河層という地層でできているが、鮎河層群からはビカリアやオキシジミなどの貝類、カニ、クジラやイルカ、アシカなどの化石が見つかっており、約1,700万年前の土山は浅くて暖かい海が広がっていたことを教えてくれる。一方、西側の信楽山地は、主に花崗岩でできており、古琵琶湖層群も分布している。

約400万年前、伊賀地方で誕生した琵琶湖は、南から北に移動し、約270万年前の甲賀は、琵琶湖の原型となる湖（甲賀湖）に覆われていた。甲賀湖や周囲の川などに堆積した砂や泥、動植物の残骸などが固まってできた地層が古琵琶湖層で、ゾウやシカ、ワニの足跡、ムカシフレドブガイなどの貝類、木の葉などの化石が多く見ついている。この地層は、固まってはいるがつつはしなどで崩せる固さで、地元ではヌリやズリンコなどと呼ばれている。水口・甲南・甲賀の古琵琶湖層群の丘陵では、地層が雨などの浸食により、多くの谷が形成され、上空から見ると谷は樹の枝のように入り組んで見える。これらの谷は水田として利用されているが、田のそばに丘のある風景は、古琵琶湖層がつくりだしたものだといえる。また、古琵琶湖層群から採集される土は焼物に適しており、水口丘陵では、古墳時代には須恵器が焼かれ、平安時代には当時の高級陶器「緑釉陶器」の一大生産拠点があったことがわかっている。一方、信楽地域の古琵琶湖層群は、花崗岩が風化して粘土化した良質の陶土を挟み、信楽焼の原料となった。

古琵琶湖層群の堆積の中心が現在の琵琶湖に移る頃には、地殻変動で鈴鹿山脈が急上昇し、市内でも河岸段丘が形成された。1万年前以降は河川によって土砂が運ばれて、野洲川や杣川の下流域や信楽盆地の河川沿いなどで沖積低地が形成された。古くからの集落や東海道などは、地盤の良い段丘面上や丘陵の縁辺に立地し、沖積低地は主に水田として利用されてきたが、近年は広く平坦であることが注目され、道路や宅地などもつくられている。

このような地形的・地質的特徴のある甲賀の大地が、甲賀の歴史文化を生み、育んできた。



左：シカの足跡化石
(水口町野洲川河床)

右：ビカリア(貝)の化石

※降雨時に河川などへの水の流出を軽減させる働き(洪水緩和)と、無降雨時に河川などへ水を安定的に供給する働き(渇水緩和)という2つの働きの中で、河川や琵琶湖の水位を平準化する役割を持つ。

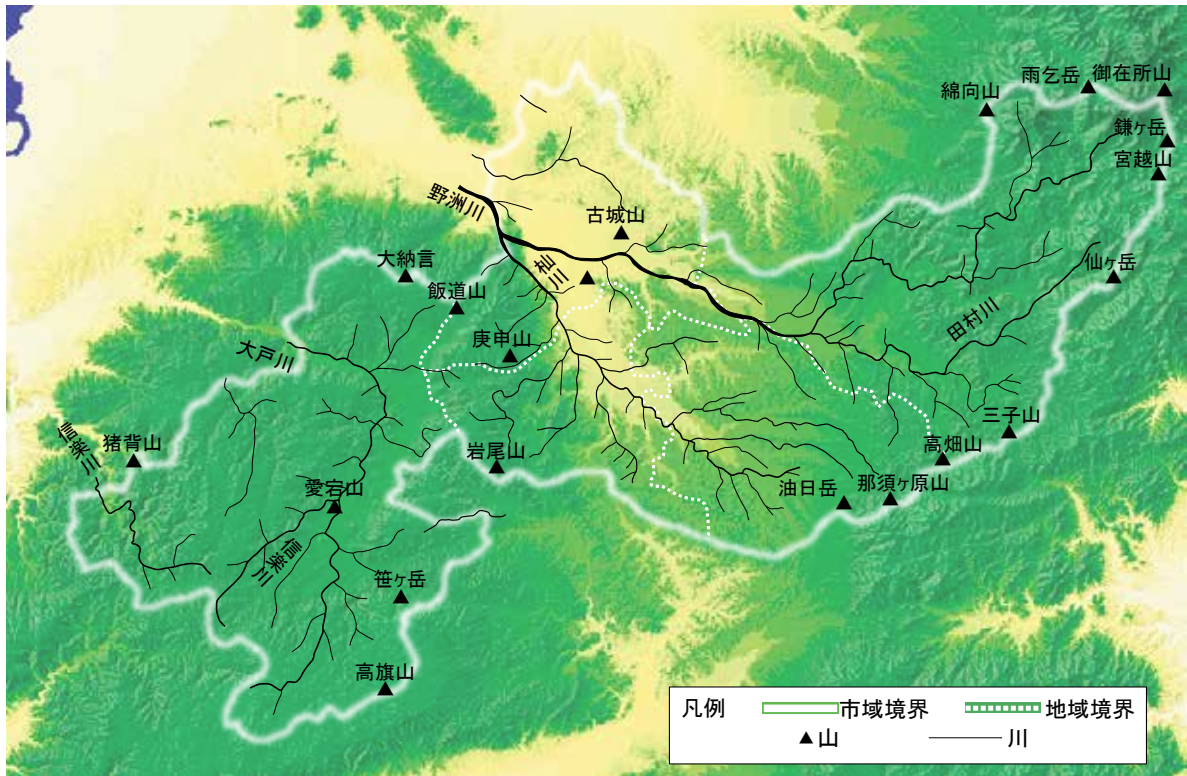


図 1-3 甲賀市の地形図

※画像の作成にカシミール 3D を使用

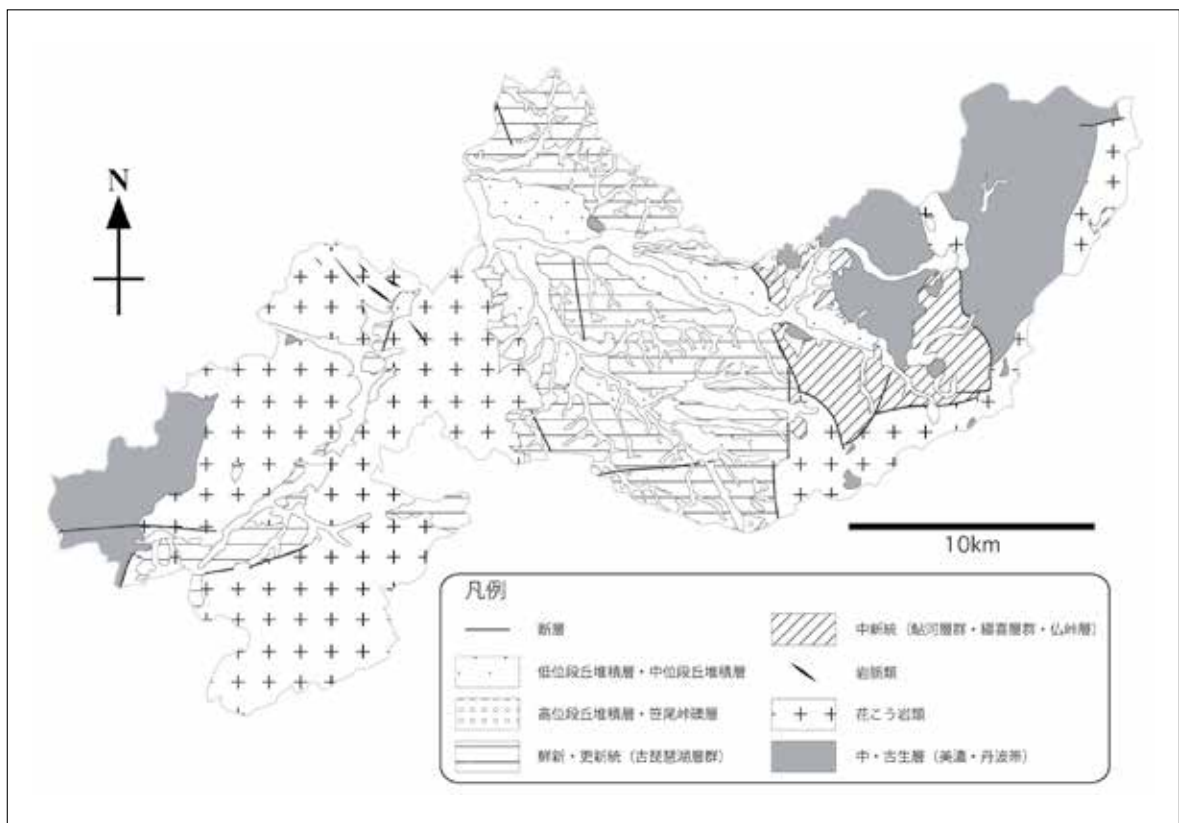


図 1-4 甲賀市の地質略図

出典：『甲賀市史』第1巻

(4) 気候

本市の平野部の年平均気温は14℃とおおむね温暖で、年間降雨量も1,500～1,600ミリメートルで、風穏やかな瀬戸内型の気候区に属しているため、農業に適した気象条件となっている。

一方、信楽や土山では標高が高く、琵琶湖から遠く湖水の影響を受けないため、年平均気温は12～13℃で、日較差や年較差などが大きく、内陸性の特徴も合わせもっている。信楽・土山地域では、昼と夜の寒暖差や、霧が発生しやすい地形を活かした茶の栽培が行われ、「土山茶」は県内一の生産量で、信楽の「朝宮茶」は日本の五大銘茶の一つとして知られる。

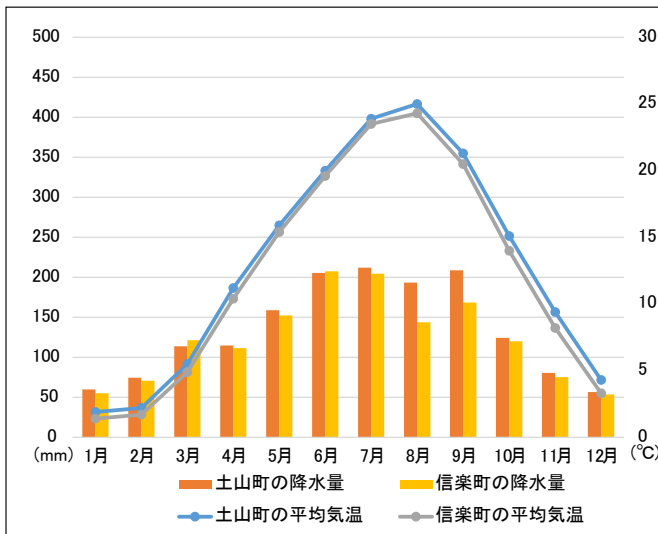


図1-5 土山・信楽の平均気温(1981～2010年の平均)



▲朝宮(信楽町)の茶畑

※年間平均気温:13.0℃ 年間降水量:1618.8mm
出典:気象庁ホームページのデータを基に事務局作成

(5) 生態系

本市は、鈴鹿山脈や信楽山地などの美しい山々を背景に、野洲川、杣川、大戸川、ササユリが自生する里山、緑豊かな田園が広がる自然環境に恵まれた都市である。

森林が市域の約7割を占める甲賀は、奈良時代には杣川流域に建設用材を供給する「甲賀杣」が置かれるなど、古代より木の諸職が発達した地域である。市内全域にわたって、山腹には第二次世界大戦後スギ・ヒノキの植林が行われ、特に土山町は古くから林業が盛んで、植林された山の風景が広がっている。

滋賀・三重の県境にまたがる鈴鹿山脈は、花崗岩の浸食地形からなる溪谷等の豊かな自然景観や、カモシカ(特別天然記念物)やイヌワシなど、特有の生物の生息、生育環境を保護する目的で国定公園に指定されている。一方、高原状の信楽山地では、尾根付近にアカマツ、ヒメコマツ(五葉松)が多く見られる。

市内には水の張られた水田、除草されたあぜ、間伐された里山など、人々の暮らしと自然が調和した昔からの環境が残っており、これら地域の自然環境を特徴づける希少な動植物が生息・生育し、ノアザミ、ノウサギ、フクロウ、カワセミ、チュウサギ、メダカなどは比較的よく見られる。例えば「杉谷新田」(甲南町)は、田畑は草刈りなど管理が行き届いて美しく、多くの動植物と共存している地域で、集落内を東海道自然歩道が通っている。このような自然豊かな里山の暮らしの中で

祭礼行事や「オコナイ」などの民俗行事が大切に継承されている。

一方で、市内が全国的に貴重な生息地の一つとなっているヤマトサンショウウオ（環境省レッドリスト 2020 絶滅危惧Ⅱ類）やカワバタモロコ（特定第二種国内希少野生動植物種）は、水環境の変化から見られる場所が限られてきており、市の花であり要注目種に指定されているササユリは、自生地が減少しつつある。このように生物多様性が急速に減少し、生態系の劣化が進んでいるなど、自然環境の質の変化が確認されており、適切な対策が求められている。



▲野洲川源流域（土山町大河原）



▲畑のシダレザクラ（信楽町畑）

（6）景観

本市は、豊かな自然環境とともに、神社仏閣や鎮守の森を中心とした集落や、街道沿いの歴史的な町並みなど、そこに暮らす人々の長い歴史の営みによって、潤いと安らぎのある景観が形づくられている。市内の身近な風景の魅力を発見し、愛着を深め、本市の良さを市内外に発信するため、本市の景観特性を顕著に表す「であい・こうか八景」（平成 21（2009）年）を選定し、景観に関する市民意識の醸成などに努めている。

表 1-1 であい・こうか八景

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①びわこの源流－野洲川とその支流の四季折々の風景 ②陶都の山容－笹ヶ岳や市の花「ササユリ」など信楽高原の豊かな自然 ③豊かな田園－良質な米を育てる甲賀の田園風景 ④お茶のふるさと－茶園・茶摘みの風景 ⑤甲賀の里を望む－日本真鍮の元祖を祀る庚申山からの眺望 ⑥東海道の道しるべ－水口岡山城が築かれた古城山（大岡山）と東海道宿場町の景観 ⑦甲賀の車窓から－信楽高原鐵道、JR 草津線、近江鐵道の車窓の風景 ⑧甲賀のにぎわい－脈々と受け継がれてきた数多くの祭りや伝統芸能 |
|---|

「甲賀市景観計画」（平成 25（2013）年）に示された景観形成の方針は次表の通りである。

また、景観形成を重点的に図るべき「景観形成地区」として5つの地区を位置づけ、個々の地域の特性を生かした景観まちづくりを進めている。

表 1-2 景観形成の方針

<p>○景観まちづくりの理念 『水 緑 まちなみが織りなす 新たな景観を創造するまち あい甲賀』</p> <p>○類型別の景観形成の方針と景観まちづくりの視点</p> <p>①水と緑が織りなす自然環境の保全—自然的景観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山、川、田んぼ、里山、集落等、心の原風景となる景観の保全 ・山なみ、田園・里山、河川・池沼を視点とした景観まちづくり <p>②悠久の歴史・文化の薫る景観の継承—歴史・文化的景観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史街道や城下町、宿場町の伝統的なまちなみに配慮したまちづくり ・史跡や城跡の景観に配慮したまちづくり ・伝統産業がいきづくまちなみの保全と形成 <p>③地域の特性を生かした美しいまちなみの創造—市街地・集落景観、道路軸・鉄道軸の景観、まちの拠点・核となる景観</p> <p>④心の豊かさを実感できる住民主体のまちづくり—市民・事業者・行政が一体となった協働による景観まちづくり</p>



図 1-6 景観形成地区

出典：甲賀市景観計画

2. 社会環境

(1) 人口の動向

甲賀市の総人口（国勢調査）は、平成17（2005）年の93,853人をピークに減少に転じており、生産年齢人口（15～64歳）も同様の傾向にある。また、15歳未満の年少人口は減少、65歳以上の高齢者人口は増加し、平成12（2000）年以降は高齢者人口が年少人口を上回る状況が続いており、本市においても人口減少と少子高齢化が急速に進行している。このままの状況が続くと、2045年の人口は71,511人と推計され、15歳未満の年少人口は8千人弱となる一方、高齢者人口は26,000人を超え、人口減少・少子高齢化は深刻な状況が予測される。

人口動態についても、平成21（2009）年以降はマイナス状況が続いている。平成21（2009）年以降は、死亡数が出生数を上回る自然減が続いている。一方、平成25（2013）年以降、市外転出が市内転入を上回る社会減が200人以上だったが、平成29（2017）年は縮小している。しかしながら、少子化・高齢化の進行は顕著で、これまで地域社会の中で伝統的な価値観を大切に、守り伝えてきた文化財や祭礼行事・年中行事の継承が問題となっているのは、その担い手の不足や高齢化だけではなく、地域社会という社会的基盤自体が脆弱化しつつあることが伺える。

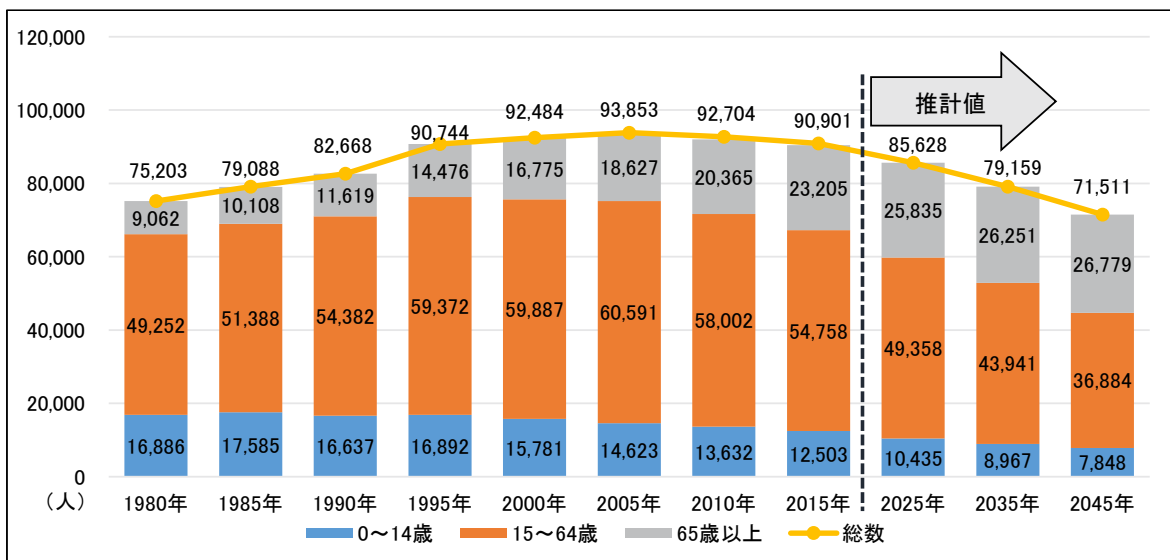


図1-7 甲賀市の人口の推移（年齢3区分）

出典：国勢調査（総務省）、『日本の地域別将来推計人口（平成30<2018>年推計）』（国立社会保障・人口問題研究所）

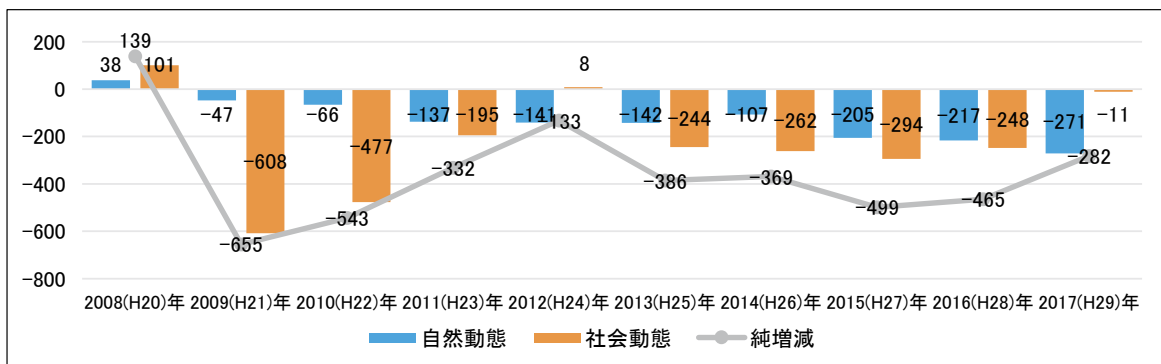


図1-8 甲賀市の人口動態の推移

出典：甲賀市統計（各年）

(2) 産業

豊富な自然資源と肥沃な土地に恵まれた甲賀市は、米や茶を中心とした農業や、歌川^{うたがわひろしげ}広重の「東海道五十三次」にも描かれたかんぴょうなどの特産品、スギやヒノキを中心とした林業、甲賀流忍者や山伏を起源とする薬業、信楽焼の窯業など歴史と伝統に培われ、長きにわたり継承されてきた様々な地場産業がある。

また、近畿圏と中部圏を結ぶ立地特性と新名神高速道路によってもたらされる交通アクセスの利便性を活かして、企業進出が進み、近江水口テクノパークや甲南フロンティアパークをはじめとした11の工業団地に、自動車関連、電子機器、金属、プラスチック製品など、多様なものづくり企業が集積立地している。

一方、観光分野の動向をみると、平成29(2017)年、「甲賀流忍者」と「信楽焼」が同時に日本遺産に認定された。本市は、国史跡の「紫香楽宮跡」^{し がらきのみやあと}や「垂水斎王頓宮跡」^{たる み さいおうとんぐうあと}、「甲賀郡中惣遺跡群」^{こう かぐんちゆうそう いせきぐん}、「水口岡山城跡」^{みなくちおかやまじょう}のほか、「東海道と宿場」、近江屈指の修験霊場「飯道山」^{はんどうさん}、多彩な甲賀の祭りや年中行事など多くの観光資源や文化資源に恵まれた地域である。また、日本建築の伝統を表す社寺や、信仰の対象と同時に仏教美術としても貴重な仏像が今も大切に受け継がれてきている。

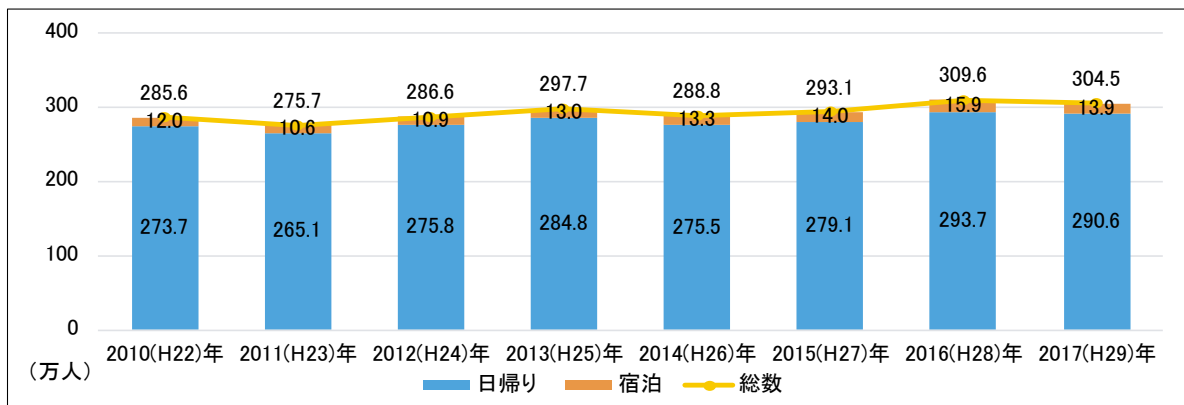
多様な歴史文化などを求めて本市を訪れる観光客は、平成24(2012)年から増加傾向にあり、平成28(2016)年からは300万人(観光入込客数)を超えており、そのほとんどが日帰り観光客となっている。今後、誘客促進に向けて、国際的にも知名度の高い「甲賀流忍者」を中心に、豊富な歴史文化資源を活用した観光振興の取り組みを推進していくが、単なる観光産業の振興だけではなく、市民が地域の歴史や文化を学び、理解を深め、それが観光ボランティアなど主体的・積極的な活動へと展開し、市民が地域への誇りと愛着を感じることによって、地域活性化につながっていくという好循環を目指している。



▲水口町の工業団地群



▲甲賀の置き薬から興った製薬業



出典：
滋賀県観光入込客統計調査(各年)

図1-9 甲賀市の入込客数の推移

(3) 土地利用

平成 29 (2017) 年の土地利用は、市全体の約 67.3 パーセントを森林が占め、農地は約 11 パーセント、宅地は約 5 パーセントとなっている。また、JR 草津線や信楽高原鉄道、近江鉄道の各鉄道駅周辺や国道沿道に建物用地が多くなっている。

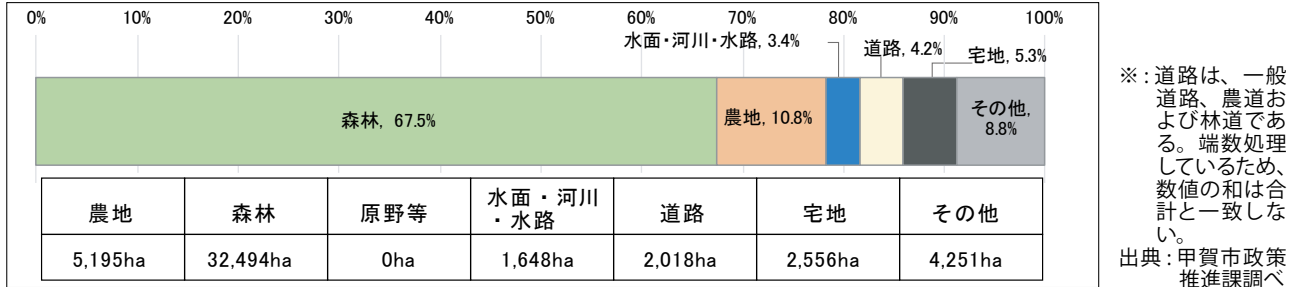


図 1-10 土地利用の割合

本市は、合併前の旧 5 町のエリアごとに、次のような特徴がある。

表 1-3 各地域の土地利用の概要

エリア	概要
水口地域	<ul style="list-style-type: none"> 野洲川、杣川が東から西へ流れ、低地部が開けている。 国道 1 号、307 号、主要地方道草津伊賀線等の主要な幹線道路が交差し、本市の中央で湖南地域等の玄関口に位置する。 JR 草津線、近江鉄道、信楽高原鉄道が結束する交通の要衝。
土山地域	<ul style="list-style-type: none"> 野洲川上流部に位置し、国道 1 号が通っている。 国道 1 号沿道に市街地や農地が立地し、三方を山地に囲まれている。
甲賀地域	<ul style="list-style-type: none"> 杣川上流部に位置し、主要地方道草津伊賀線、JR 草津線が通っている。 杣川沿いの低地部に市街地や農地が連なり、概ね東西の 2 方向を山地に挟まれている。
甲南地域	<ul style="list-style-type: none"> 杣川下流部に位置し、主要地方道草津伊賀線、JR 草津線が通っている。 杣川沿いの低地部に市街地や農地が連なり、概ね東西の 2 方向を丘陵地や山林に挟まれている。 南北の丘陵地は、住宅地や工業団地の開発が行われている。
信楽地域	<ul style="list-style-type: none"> 国道 307 号、422 号や信楽高原鉄道が通っている。 大戸川、信楽川の流域で、河川沿いの谷部に集落地や農地が連なり、大戸川上流部に市街地が形成されている。

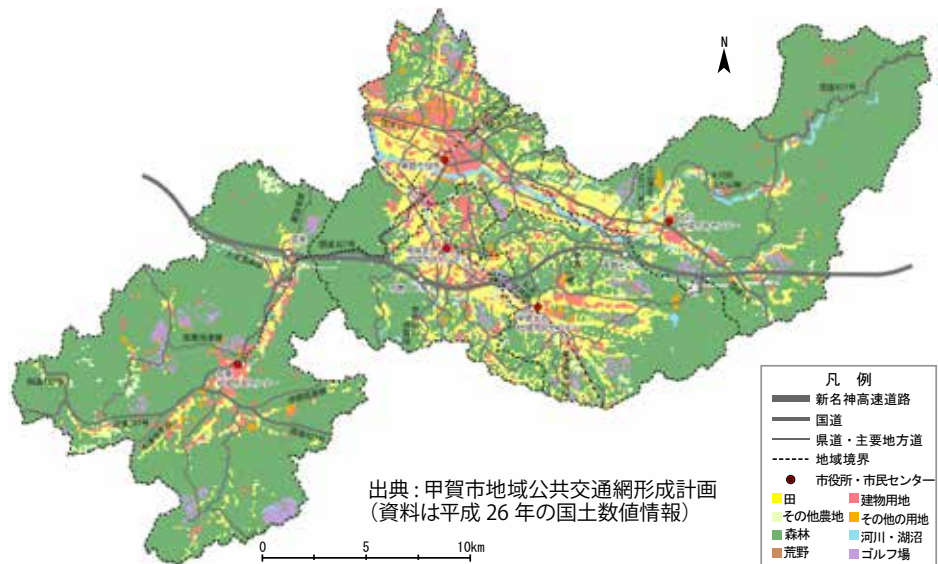


図 1-11 土地利用の状況

(4) 交通

主な交通の軸としては、国道1号が東西に横断し、国道307号が南北に縦断している。これらに加えて、平成20（2008）年には、新名神高速道路が開通し、市内に3つのインターチェンジが設置されたことで、近畿圏と中部圏を結ぶ広域交通の要衝として、重要性がさらに高まっている。鉄道は、JR草津線が北西から南東に走り、貴生川駅を起点として、北東方向に近江鉄道本線、南西方向に信楽高原鐵道が延びているが、いずれも単線であり利便性が高いとはいえない状況となっている。

市内の主要な路線沿道や都市計画道路沿道に位置する文化財も多く、また、国道1号、国道307号、国道477号及び県道大河原北土山線については、沿道景観形成地区に位置付けられている。



図1-12 市内交通と主な文化財・景観地区との関係

※文化財は、主な国指定・登録有形及び県指定有形の文化財

出典：甲賀市道路整備基本計画

3. 歴史・文化

(1) 原始

甲賀市域で人々の生活の痕跡が確認できる最も早いものは、土山町野上野と甲南町新治で見つかった、縄文時代草創期（1万2000～1万年前）の有舌尖頭器がある。また、市内には縄文時代早期（1万～6000年前）の土器が見つかった油日縄文遺跡（甲賀町油日）、縄文時代早期後半の土器や石鏃などが多数出土した寺山遺跡（甲南町新治）があり、温暖期であった縄文早期には人々が定住していたことがわかる。丘陵や山地の多く豊かな自然資源に恵まれた甲賀は、縄文人にとって適地であったのだろう。

しかし、弥生時代の集落遺跡となると甲賀市では確認されていない。甲賀の鈴鹿山系を源とする野洲川は、長い歴史の中で流れを幾度も変え、河口部に広い扇状地や三角州からなる沖積平野を形づくってきた。こうした低湿地帯は米作りに都合のよい場所だったと考えられ、甲賀周辺では野洲川河口部で、巨大な環濠集落を持つ下之郷遺跡（守山市）などが見つかる。甲賀においては、土山町山女原の山中から、伊勢湾地域の特色をもつ弥生時代末期の土器が見つかり、鈴鹿山脈を挟んで人々の交流があったことがうかがえるが、弥生時代の人々の営みについては痕跡が少ない。

(2) 古代

古墳時代になると、甲賀においても人々の活動が活発となる。甲賀市域最古の古墳は、水口町泉の丘陵上に築かれた古墳時代中期の西罐子塚古墳で、隣接する東罐子塚古墳やその麓に築かれた泉塚越古墳とともに「泉古墳群」と呼ばれる。また、後期には岩室塚穴古墳（甲賀町岩室）が築造される。これらは、野洲川上流域の首長墓とされ、特に塚越古墳は銅鏡や金銅製の甲冑などを副葬していることが注目される。泉古墳群の東南部に位置する植遺跡（水口町植）からは、5世紀中頃の大型倉庫建物群や大規模な集落跡が見つかり、甲賀の首長層が、ヤマト王権と直接的な関係性を有したと推定させる。古墳時代後期から終末期にかけては、野洲川と杣川の山沿いに、横穴式石室をもつ群集墳が築かれる。岩坂古墳群・高山古墳群・波濤ヶ平古墳群などが知られ、特に園養山古墳群（湖南市）以南の飯道山麓には数百基を超える群集墳が連続し、「甲賀群集墳」と呼ばれる。こうした大規模群集墳の造営には、植遺跡など周辺地域の人々の活動や渡来系文化の様相などがうかがえる。また、古墳時代終末期から飛鳥時代にかけての集落遺跡である下川原遺跡（水口町泉）では、東国から搬入された土器や東国系の竪穴住居が確認され、蝦夷の人々が移住させられた様子もうかがえる。



▲内行花文鏡（塚越古墳出土：水口町泉）

甲賀の郡名を表記した資料としては、平城京から出土した木簡に「甲可郡山直郷」と記されたものが最古で、奈良時代前期の和銅から養老年間（708～724）のものとする。また、『続日本紀』天平14（742）年3月5日条に聖武天皇が初めて恭仁京東北の道を開き、「近江国甲賀郡」に通じ

るとある。一方、『日本書紀』^{びだつ}敏達天皇 13 (584) 年 9 月条には、^{くだら}百濟から^{みろく}弥勒石仏を日本に持ち帰った「^{かふかののみ}鹿深臣」氏の記事があること、また^{じんしん}壬申の乱を記した^{てんむ}天武天皇元 (672) 年 6 月 24 日条に「鹿深」、さらに同 7 月 5 日条に「鹿深山」とみえることなどから、地名としてのコウカ、カフカは 6 世紀後半にさかのぼり、奈良時代には郡名となり、表記も「甲賀」に定着していったと考えられる。甲賀の地が古代史上最も注目されたのは、^し聖武天皇による^し紫香^ら樂宮の造営であろう。天平 14 (742)

年 8 月に造営に着手し、同 15 (743) 年 10 月に^{るしやなだいぶつ}盧舎那大仏建立の詔が出された。その後、^な聖武天皇は信楽に行幸を重ね、天平 17 (745) 年元旦には信楽を「新京」と呼び、首都としての役割を担う都となった。しかし、同年 5 月には平城京へと還都することとなる。紫香樂宮には、^な恭仁宮の造営や^な難波宮への遷都など、奈良時代中頃の政権内での勢力争いの中にありながら、^な聖武天皇の悲願であった大仏造立を目指して造営が進められた。しかし、計画は頓挫し、短期間の都であったため、その場所は早くに不明となってしまった。再び宮跡に人々の関心が向けられるようになったのは江戸時代のことである。その後、大正 15 (1926) 年に、^{きのせ}黄瀬から^{まき}牧にまたがる^{だいのりの}内裏野丘陵の礎石遺構が「^{ぐうし}紫香樂宮跡」として国の史跡に指定された。これは後に甲賀寺跡と考えられるようになる。昭和 59 (1984) 年からは^{みやまち}宮町遺跡の発掘調査が継続的に行われ、以降重要な発見が続いた。中でも平成 12 (2000) 年には、宮の中心の西朝堂と考えられる建物遺構が見つかり、その後、^な宮殿中枢部の調査が進み、朝堂区画の全容がほぼ



▲紫香樂宮跡 正殿・後殿・東脇殿 (信楽町宮町)



▲甲賀寺跡 (信楽町黄瀬・牧)

明らかになった。また、紫香樂宮に関連する遺跡も次々と確認され、古の都の姿が徐々に解明されつつある。さらに、^{あさかやま}宮町遺跡では、大量の木簡や多くの墨書土器が出土しているが、その中に万葉集に収録された^{あさかやま}安積山の歌と^な難波津の歌が書かれたものが発見され、日本文学の成立史に影響を与える画期的なものとなった。

紫香樂宮以外の市域の古代に目を向けると、東海道の重要性が浮き彫りとなる。古代東海道の経路は、都の所在地によってたびたび変更され、^{きづ}大津宮時代には甲賀から伊賀に通じる道が東海道となった。その後、東海道は平城京時代には^{きづ}木津川沿いを伊賀から伊勢に通じる経路となったが、平安京に遷都された後には、再び甲賀を通るようになった。当初は^{くらふ}杣川沿いの倉歴道が用いられたが、^{あすは}仁和 2 (886) 年に^{あすは}鈴鹿峠から伊勢へと越える阿須波道が開かれ、その年の 9 月には伊勢へと下向する^{さいおうぐんこう}斎王群行がこの道を通った。甲賀郡域には、^{あすは}岡田駅と甲賀駅、これに近接して^{ぐんが}斎王群行の宿泊施設である甲賀・垂水の頓宮が置かれたが、甲賀郡衙や甲賀駅の位置については諸説あり、いまだ確認されていない。

また、奈良時代には、甲賀郡に東大寺や石山寺の造改築用材を出す甲賀杣が設定され、これを管

理する山^{やまつくりどころ}作所^{やがわつ}や矢川津などの川津が置かれた。平成17(2005)年、甲南町新治での工事中に7世紀に伐採された加工痕をもつスギの巨木が発見され、用材の供出地としての歴史がさらにさかのぼることがわかった。甲賀の豊かな森林資源は、古くから注目されてきたようである。甲賀の古代は政権との密接な関わりの中で営まれていたといえる。



▲飛鳥時代の埋もれ木(甲南町新治)

一方、甲賀の古代は豊かな宗教文化が花開いた時期でもあった。式内社や国史見在社など古代に由緒をもつ神社が史料にみえるようになり、寺院では、天台宗の教線が浸透するに従い、櫛野寺^{らくや}などの拠点寺院が建立され、多くの仏像が造立・安置されていった。これらは後の時代でも地域の紐帯となり、人々の暮らしとともに受け継がれてきたものであり、古代の息吹を今に伝える、まさに甲賀の宝というべきものであろう。

(3) 中世

甲賀の中世は平安時代末期の11世紀ごろから戦国時代末期にあたる天正13(1585)年までのおよそ500年間で、特に室町時代中頃から戦国時代末期にかけては、今の甲賀につながる基礎的な構造ができあがったという意味で重要であり、特に武士が活躍した甲賀武士の時代である。

甲賀には古代にさかのぼる蔵部荘^{くらぶのしょう}などがあったが、平安時代にはさらに広がって大原荘^{おおはらのしょう}・池原^{いけがはら}・杣荘^{そまのしょう}・儀俄荘^{ぎかのしょう}・柏木荘^{かしわざのしょう}・信楽杣(信楽荘)などが設置された。中でも甲賀武士の雄・山中氏が伝えた「山中文書」が中心舞台とする柏木荘は良く知られており、平安時代末期には伊勢神宮の御厨^{みくりや}になっている。また信楽荘は近衛家が単独で権利を所有する荘園で、近衛家はここから材木・薪炭・茶などを得ていた。こうした荘園の中で成長したのがいわゆる「甲賀武士」であった。

その代表的な存在が柏木の山中氏で、鎌倉幕府の御家人として鈴鹿山警固役を務め、室町時代には管領細川家に接近して甲賀の外に所領を得、時には足利将軍を居館に迎えるなど、時代ごとの権力とうまく付き合いながら、根拠地となる柏木を維持しつつ勢力を伸張していった。柏木は古代および江戸時代の東海道にあたる、京と伊勢神宮を結ぶ「伊勢大路」の途上にあつたこともあって、山中氏は中世の重要幹線の管理に大きな力を握っていたと考えられる。こうした山中氏の活動は、同時期に活躍した大原氏^{おほはら}や伴氏^{ばん}など甲賀武士にも共通するものと考えられる。彼らは室町時代に各自の拠点に城館を築くが、その数は180にもものぼっており、甲賀武士の象徴ともなっている。

また、甲賀武士の特徴の一つに、同じ苗字を共有する同族集団である「同名中^{どうみょうちゆう}」を組織していた点がある。同名中は特定の一家だけではなく、複数の家々が惣領家か庶子家かによらず平等な関係にあり、様々な



▲鈴鹿峠を望む(土山町山中)

問題を合議制により解決して地域支配・地域運営を行っていたことが判明しているが、こうした組織が中世の甲賀市域にはいくつも存在していた。戦国時代末期、織田信長が畿内に進出してきたころには、郡内の同名中同士がさらに結合して「(甲賀)郡中惣」を組織するようになり、すでに成立していた隣国伊賀の同種の組織である「伊賀惣国一揆」とともに、自らの力で強大な権力に対峙しようとする動きをみせるなど、きわめて自律性に富んだ活動をしていたことは、中世甲賀武士の大きな特徴である。

彼らはまた各拠点に寺院や神社を造営したが、油日神社や矢川神社などの郷や荘園、谷といった単位に成立し、広域に影響力をもった郷鎮守社は、同名中や郡中惣に参加した甲賀武士たちの結集の場であり精神的紐帯となっていた。

さて、織田信長が上洛途上に六角氏と対峙した時、甲賀武士の多くは六角氏方として戦い、敗北を喫する。これによって織田家の軍門に降った甲賀武士は、続く豊臣政権時代を通じて「甲賀衆」という集団として天下統一戦争に動員されるよう



▲油日神社 (甲賀町油日)

になる。「陣立書」によれば、その規模は1,000人で、具体的な働き方は明らかにならないが、同名中や郡中惣がもっていた平等性の論理にもとづくであろう集団としての性格がここにも見て取ることができるだろう。

しかし天正13(1585)年、やはり軍団の一翼として動員されていた甲賀武士は、紀州雑賀攻めにおける失策を理由に改易処分を受ける。これを「甲賀ゆれ」と呼ぶが、これによって甲賀武士が甲賀郡を支配する時代は終わりを告げた。江戸時代になって、甲賀武士の活躍した時代を思い起こして「甲賀の刻(時)」と呼び、甲賀武士の子孫が中世甲賀武士の姿を尊んで由緒書にその功績を詳しく記したのは、それだけ甲賀の人々にとって中世甲賀武士の存在が大きかったことを示している。

なお、中世は神仏習合が一層進んだ時代であり、古代以来の伝統ともに、甲賀には豊かな宗教文化が花開くことになる。それを示すものが今に残る中世建築や多くの鎌倉仏、あるいは飯道山で発達した修験である。産業面では鎌倉時代後期に常滑の技術が導入された信楽焼の生産が開始される。当初は壺・甕・播鉢などの大型日常雑器を中心としたが、15世紀の末には茶の湯で使用される茶陶としても注目されるようになる。こうした産業・宗教文化は、次の近世にさらに発展し、甲賀を特徴づけるものとなっていく。



▲飯道神社・飯道山遺跡 (信楽町宮町)



▲戦国期の城館跡 (貴生川遺跡・水口町貴生川)

(4) 近世

甲賀の近世は天正13(1585)年に始まる。この年は、甲賀武士が甲賀での支配権を失った「甲賀ゆれ」が起こり、その直後に、豊臣政権によって交通の要衝・水口に水口岡山城が築かれた。これは、中世甲賀武士を中心に維持されてきた地域秩序が崩壊し、甲賀が新たな時代へと移り変わる象徴な出来事となった。中村一氏・増田長盛・長束正家という豊臣の重臣が居城とした水口岡山城は、関ヶ原の戦いの後、しばらくして廃城となりその役割を終えるが、同城が甲賀に持ち込んだ新しい仕組みは、まもなく天下を統一した徳川政権(江戸幕府)がこれを継承・発展させたことで、その後の甲賀の行き先を方向付けた。例えば、神社や寺院、集落の位置、道の通り方など、今の甲賀市で目に見えるものの多くは、江戸時代に整備されたものである。



▲水口岡山城跡遠景

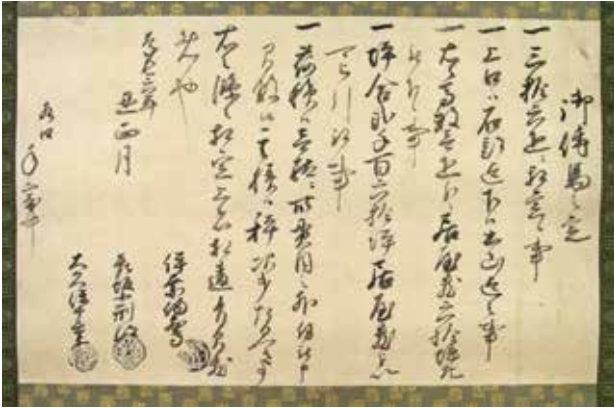
中世との最も大きな違いは、侍としての甲賀武士が甲賀の町や村の土地と人の支配から排除され、村の境界が明確に把握されたことである。これによって、江戸時代の甲賀郡には大小含めて137の村(市域に限れば121カ村)が成立、村には百姓が、町には町人が住み、これを城下町などの支配拠点に住む領主層が支配するようになった。石高は7万8128石余である。



▲水口城跡(水口町本丸)

江戸時代の甲賀の領主は当初幕府直轄が大半で、元禄時代以降は大名・旗本が多くを占めるようになるが、甲賀の四分の一を領した水口藩2万石(のち2万5000石)が最大で、近世初期の水口岡山城下を原型とする甲賀の首邑水口宿を城下とした。また、信楽の多羅尾氏は中世以来の本拠地多羅尾村とその近辺を所領とし、江戸時代には珍しい世襲代官として活動したほか、かつての甲賀武士である美濃部・黒川・山岡・和田・山中氏なども幕府旗本となって甲賀に所領を持っていた。これは反面、全域を一円支配する領主がいなかったことも意味するが、そのことは甲賀の町人や百姓が主体的な活動を行う余地を多く残すことにつながったともいえる。

そうした江戸時代の甲賀を文化・経済面から考えたとき、東海道及び土山・水口の両宿が重要である。両宿は中世以来の町場で、ともに慶長6(1601)年に宿駅に指定されて以降は、郡内各地域から両宿につながる大小の道が整備されて、その後の甲賀の発展の基礎となった。両宿は当初幕府の重要な軍事の継立拠点として位置づけられ、社会が安定した寛永期(1624~1644)以降は、大名の参勤交代や庶民の旅の拠点として、幕末まで多くの人々が往来するようになった。水口細工やお六櫛など道中の名物も生まれ、俳諧をはじめとする人々の盛んな文化活動の痕跡が今に残る。土山宿は江戸時代を通じて幕府領、水口宿は江戸時代前期までは幕府領、以後は水口藩の城下町として推移したが、両宿の間屋や本陣などの宿役人層は、かつての甲賀武士の子孫が担うことも多かった。両宿を結ぶ東海道沿いの村々は街村化し、一定の間隔で大名などが休憩する立場や茶屋も生まれた。



▲御伝馬之定（慶長6年正月：『東海道水口宿文書』）



▲歌川広重画「東海道五拾三次之内 土山」

江戸時代の甲賀の産業としては信楽焼、茶、^{まえびきのこ}前挽鋸、薬などがあり、それらに関わる陶工・茶問屋・杣・木挽・大工・里山伏などの諸職がいた。これらの物と人は概ね中世以来の伝統を引き継ぐものが多いが、江戸時代には東海道を通じて展開することでさらなる発展を遂げることになる。

ところで甲賀の江戸時代を語る上で欠かせないものに「甲賀古士^{こし}」がある。甲賀古士は「甲賀の古い士(侍)」の意で、甲賀ゆれによって支配権を失い、甲賀に帰農した中世甲賀武士の子孫の自称で、江戸時代を通じて軍事スキルの伝承を根拠に仕官活動を繰り返したことで知られる。実際に仕官することは叶わなかったが、彼らは中世以来の武士としての由緒を盛んに作成し、これを共有できる家々を限定することで、甲賀郡内でやや特殊な立ち位置を占めた。その一部は村役人や宿役人、町場の有力者、あるいは大名や旗本の在地代官として活動している。

これに関連して、江戸時代に発展したものに忍者・忍術がある。これは中世にその源を発し、江戸時代にその具体的な姿を整えた武芸であり独特の文化の一つである。甲賀の外ではすでに江戸時代初期から忍びとしての^{こうかもの}甲賀者は有名で、江戸幕府の「甲賀百人組」や岸和田藩の「甲賀士五十人」など、実際に集団で「甲賀者」として^{おわり}雇用され、中には明確に忍びとうたわれる尾張藩の「甲賀五人」のような例もある。市内に忍術関係の古文書も複数残されている。甲賀の忍者・忍術の実態にはまだまだ不明な点が多いが、先に触れた甲賀古士が江戸時代後期に忍術を伝承してきたと由緒を主張する場合もあり、甲賀武士に付属する多様な性質の一つとみることができる。



▲江戸時代に著された忍術の秘伝書「万川集海」

江戸時代後期、社会全体が徐々に安定を失い始めるころ、甲賀でも農民一揆「天保一揆^{てんぽういつき}」が起きた。これは幕府の増税政策の一環で行われた川沿いの^{けみ}検見（耕作地の実態調査）に端を発するもので、これに反発した甲賀の人々が天保13（1842）年に幕府役人を野洲の^{みかみ}三上陣屋で糾弾し、検地の日延べ十萬日を勝ち取ったという事件である。首謀者と目された者たちは投獄され江戸へ連行されたが、そのほとんどが命を落とすという結果に終わった。彼らはいわゆる「天保義民」として村々で丁重に扱われて長く記憶に残り、明治時代には甲賀の一体性の象徴として中世の甲賀郡中惣とともに挙げられるほどになる。

(5) 近現代

江戸幕府から明治新政府に替わり、政治・経済・社会・文化など地域の状況は大きく変化した。第一は行政組織の再編である。甲賀市域では、旧幕府領や旗本領は大津県（当初は大津裁判所）に、水口藩などの諸藩は、明治4（1871）年7月の廃藩置県により、水口県や宮津県などを経て大津県に編入、翌5（1872）年に大津県は滋賀県となり、これと犬上県が合併し滋賀県が成立した。同年には区制が敷かれ甲賀郡は10区に分割され、甲賀市域はこのうち2～10区に編成された。

明治12（1879）年には郡制が敷かれ、水口に郡役所が置かれた。郡は地方自治体となり郡長を任命、郡会議員を選出して郡会を構成した。明治18（1885）年の連合戸長役場制を経て同22（1889）年の町村制施行により甲賀市域には21カ村が成立した。明治27（1894）年に水口村、大正5（1916）年に土山村、同10（1921）年には長野村がそれぞれ町制を敷き、昭和5（1930）年には長野町は信楽町と改称した。一方郡制は大正12（1923）年に廃止され、同15（1926）年には郡役所もなくなった。

明治維新後、近代化を最も印象づけたものに学校教育がある。明治5（1872）年に頒布された学制には国民皆学が掲げられ、各地域には地元住民の尽力により小学校が設立された。以後学制の改革により市域に尋常小学校が12校発足し、義務教育は6年となり、大正8（1919）年には県立水口中学校が開校した。昭和になり戦時体制が強まると教育にもその影響が現れ、昭和16（1941）年に小学校は国民学校に改編、生徒の勤労働員も行われた。

交通面に着目すると、明治23（1890）年に関西鉄道の草津・柘植間（現JR草津線）が全通し名古屋・京都方面につながり、同33（1900）年には近江鉄道が開通しこれに接続した。さらに昭和8（1933）年には国鉄信楽線が開業し、信楽焼の全国輸送を支えた。

道路では、宿駅制度の廃止にともない東海道の旧2宿は大きな打撃を受けるが、引き続き近代化の拠点となっており、東海道をはじめ県・郡・町村道の整備・橋梁の建設に力が注がれる。明治21（1888）年には杣街道を一新して三雲・柘植間に「新海道」が開通。自動車輸送時代に入った大正12（1923）年には鈴鹿峠に鈴鹿隧道が開通し、昭和7（1932）年に省営バス亀三線が開業したことで旧東海道筋の利便を確保した。

産業では、製茶業と養蚕業は幕末開港以降盛んとなり、重要な輸出品として注目された。また、日用品としての信楽焼も市場を拡大、水口細工や前挽鋸生産も盛んとなり、修験道の配札活動から転じた売薬業が新たに起こり、販売ルートは広がりを見せた。現在でも信楽焼、茶業、薬業は甲賀を代表する産業として伝統を受け継いでいる。

近代の歴史の中で相次ぐ戦争は地域に大きな影響を与えた。明治27（1894）年から同28（1895）年までの日清戦争、明治37（1904）年から同38（1905）年までの日露戦争では甲賀からも従軍しており、日露戦争の戦没者は甲賀郡全体で175人にのぼり、市内各地に忠魂碑が建立された。昭和期には、昭和12（1937）年の日中戦争、同16（1941）年の太平洋戦争と、同20（1945）年8月に終戦を迎えるまで日本は総力をあげて戦争を継続し、甲賀出身の戦没者は2,155人の多くにのぼった。この戦争は、従軍者だけでなく、「銃後」と呼ばれたその家族や郷里の人々も国家に協力し遂行されたもので、まさに総力戦の様相を呈した。信楽では信楽線のレールが回収されたほか、金属代用品の生産が行われ、陶製兵器も作られた。また、昭和19・20（1944・45）年には大阪からの疎開児童の受け入れも行われた。戦争の体験記や残された資料など、当時の様子がわかるものは決して多くはないが、平和への思いを新たに、戦後の甲賀は大きな変革期を迎えることとなる。

戦時下の昭和18(1943)年には合併により甲南町が成立。戦後の昭和29(1954)年には信楽町、翌30(1955)年には水口・土山・甲賀の各町がそれぞれ合併により新たな町として成立した。戦後の地域発展の要因には交通網の整備が挙げられる。昭和27(1952)年から国道1号が整備され、同40(1965)年には名神高速道路が全通した。名阪国道や東・西名阪自動車道が甲賀地域に隣接して次々と開通し甲賀にも高度経済成長の波が直接押し寄せた。同45(1970)年には国道307号が昇格整備され、これら幹線道路に県道・町道などが結ばれ道路網が充実していく。そして平成20(2008)年には新名神高速道路が開通、甲賀市内に甲賀土山・甲南・信楽の3インターチェンジが置かれ大きな利便を得た。

これら交通網の整備や、近畿圏と東海圏の中間という恵まれた立地を背景に、昭和40年代には内陸型工業団地の立地も進み、これに伴い周辺地域での住宅地開発も行われた。こうした中で人々の生活環境も変化していき、上下水道の整備、福祉・厚生制度の充実、教育や文化施設の整備拡充など、各町がそれぞれ豊かで住みよいまちづくりを目指し発展を遂げ、平成16(2004)年10月、旧甲賀郡の水口・土山・甲賀・甲南・信楽の5町が合併し甲賀市の発足に至った。

豊かな歴史文化を背景に、道とともに、そしてものづくりとともに歩み発展してきた甲賀の伝統は、今日も変わることなく継承され、いつもの暮らしにしあわせを感じるまちを目指した取り組みが行われている。



▲大正時代の水口市街



▲甲南駅(昭和40年代)



▲国道307号昇格パレード

4. 甲賀市における文化財の概要

(1) 指定文化財

甲賀市における令和2(2020)年3月30日現在の指定文化財件数は275件で、国指定65件、県指定33件、市指定が146件、国選択が1件、県選択が11件、国登録が19件となっている。種別では、建造物が28件、美術工芸品が170件、無形文化財が1件、民俗文化財が12件、記念物が33件、選択無形民俗が12件、登録建造物が19件となっている。(表1-4参照)

美術工芸品の中でも仏像彫刻が格段に多く、平安彫刻の宝庫とされるのは、天台宗の浸透と国や中央の寺社・貴族による杣や荘園の開発によるものと考えられる。また、建造物や伝統行事は、中世・戦国期の甲賀武士たちの活躍を今に伝える。

史跡では、紫香楽宮跡関連遺跡群の調査が行われ、平成27(2015)年10月に新宮神社遺跡・鍛冶屋敷遺跡・北黄瀬遺跡が国史跡に追加指定されるほか、市内に集中する中世城館の調査も進み、平成20(2008)年7月には甲賀郡中惣遺跡群の指定と、平成29(2017)年2月には甲賀を代表する織豊期城郭である水口岡山城跡が国史跡に指定されている。民俗文化財では、平成27(2015)年3月に「近江甲賀の前挽鋸製造用具及び製品」が国の指定を受け、また、日本六古窯として信楽焼が日本遺産の認定を受け、伝統産業にかかる文化財も注目されている。平成29(2017)年度には、これまで調査してきた指定文化財の個別の内容が把握できるようデータベースを作成した。

表1-4 甲賀市内所在指定文化財等一覧

種 別		国	県	市	合 計		
有形文化財	建 造 物	7	3	18	28		
	美術工芸品	絵 画		3	11	14	
		彫 刻	47	12	51	110	
		工 芸 品	1	1	15	17	
		書 跡	(2)	3	3	16	22
		考古資料			6	6	
		歴史資料			1	1	
		美術工芸品小計	(2)	51	19	100	170
小 計	(2)	58	22	118	198		
無 形 文 化 財				1	1		
民俗文化財	有形民俗文化財	1		3	4		
	無形民俗文化財	1	3	4	8		
	小 計	2	3	7	12		
記 念 物	史 跡	4	7	13	24		
	名 勝			2	2		
	天然記念物	(1)	1	5	7		
	小 計	(1)	5	8	20	33	
選択文化財	無形民俗文化財	2	11		13		
登録文化財	登録有形文化財(建造物)	19			19		
合 計		(3)	86	44	146	276	

- 注:
1. 国指定の有形文化財は重要文化財の件数を示し、うち国宝の内数を括弧内に示す
 2. 国指定の天然記念物の件数のうち、特別天然記念物の内数を括弧内に示す
 3. 有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物の欄は指定件数を示す
 4. 選択文化財の欄は選択件数、登録文化財の欄は登録件数を示す

(2) 地域文化財の状況と今後について

市内の埋蔵文化財（遺跡）については、周知の埋蔵文化財包蔵地（埋蔵文化財の存在が知られている土地）の件数は589件（『平成28年度 滋賀県遺跡地図』掲載遺跡数）となっている。（表1-5参照）

表 1-5 地域別埋蔵文化財包蔵地件数

地 域	件 数 (件)
水口町域	129
土山町域	58
甲賀町域	131
甲南町域	102
信楽町域	169
合 計	589

市内の地域文化財調査では、市史編さん事業により、古文書では168文書群の調査を実施（平成16<2004>年度～28<2016>年度）、中世城館調査では180カ所の遺構確認と概要図を作成している（平成19<2007>年度～21<2009>年度）。金石文調査では1,314件を（平成17<2005>年度～20<2008>年度）、道標調査では132基を確認した（平成22<2010>年度～26<2014>年度）。建造物では、滋賀県の近代和風建築調査や近世民家調査等で状況把握を行っており、宝篋印塔などの石造建造物は48件の調査を実施した（平成18<2006>年度～20<2008>年度）。また、祭礼行事・年中行事については、843件（休止・中止含む）を確認した（平成18<2006>年度～20<2008>年度）。

上記のうち、古文書、中世城館、金石文（一部道標含む）、祭礼行事・年中行事については、平成29（2017）年度、指定文化財と同様に、これまでの調査結果をもとにデータベースを作成した。

今後の調査については、古文書は地域や個人で所有されているものを中心に調査を実施していく。美術工芸品では彫刻の調査は進んでいるが、絵画や工芸品などについては十分ではなく、宗教絵画や墨跡などの調査が必要である。甲賀の特徴である伝統産業についても、調査が進められている信楽焼のほかに、薬業や茶業など今も地域の産業として発展しているものについての総合的な調査が求められる。また、日本遺産の認定をうけた忍者についても、新たな発展のために、関連する文化財の調査が期待されている。

地域文化財については、上記調査のほか、平成30（2018）年度に歴史講演会などの参加者に行ったアンケートでは、甲賀の歴史文化で大切な、あるいは特徴的だと思われる文化財としては、「水口岡山城跡」「中世城館跡」「甲賀忍者」が多く挙げられた。

なお、平成29（2017）年度に作成した指定文化財等のデータベースについては、新たな調査結果など情報を更新するとともに、データベースが未作成の分野や今後の調査対象となる伝統産業などの分野を追加し、甲賀市内全体の文化財をトータルに把握していくための総合的なデータベースとして整備していく必要がある。

5. 甲賀市の歴史文化の特徴

第1章でみてきた甲賀市の概要および第1章第4項の甲賀市における文化財の概要を踏まえると、甲賀市の歴史文化の特徴は次のようにまとめることができる。

本市のもととなった甲賀郡は、近江国を構成する一郡らしく、市内を通る東海道などの主要街道を通じ、京都・奈良・伊勢・伊賀といった近隣はもちろん、遠く東海地域や大坂方面との強いつながりが古くから形づくられ、絶え間ない政治・経済・文化・宗教の各方面の交流の中で豊かな歴史文化を紡いできた。

一方で甲賀は、滋賀県内では琵琶湖に隣接せず、むしろ峻厳な山岳に四方を包まれつつ、甲賀・甲南町域を中心に古琵琶湖層により形成された複雑な地形が広がる地理的環境下にあった。そしてまさにそのことが、街道と山に宗教的・軍事的拠点が多く築かれるという、近江国でも特有の空間形成をうながしたのである。

そして、甲賀は各時代の中央権力と適度な距離感を保てる地政学的条件下にあったことも影響し、甲賀の住人は中央との関係を維持しつつ、完全にはその支配下におかれずに独自の活動を続けてきた。そうした甲賀の歴史文化を特徴づけるものとして、次のものを挙げるることができる。

- ア. 古代以来の交通の要衝として、ヒト・モノ・文化が行き交っていた
- イ. 中世に活躍した甲賀武士が地域の基礎を作り、後世に大きな足跡を残していること
- ウ. 豊かな山林資源を活かして、杣木挽・大工・焼物など様々な技術体系が発展したこと
- エ. 神仏習合状況の中、神社・寺院、そして修験が混じり合った宗教文化が形成されたこと

もちろんいずれもが連環する要素だが、太古の名残りである古琵琶湖の粘土層地帯であり、そこで形成された甲賀の山や谷・川がこれらの根本となっている。

こうした特徴をもった甲賀が、歴史的にどのように展開したかといえば、大きく二つの方向性があったように思われる。

一つは甲賀の内側での展開である。例えば、甲賀で造像された平安・鎌倉仏の数々であり、各地に割拠した多くの甲賀武士と彼らの築いた甲賀の城々であり、それぞれの谷に鎮座した郷鎮守であり、飯道山・庚申山・岩尾山などの霊山に開かれた修験の修練場、信楽谷で焼かれた信楽焼などがそれにあたる。

いま一つは甲賀の外への展開である。例えば、杣や木挽・大工などは京都などの大規模な作事に、里山伏とその子孫は遠く離れた地で配札と売薬活動に、戦国時代の甲賀武士は各地の戦場で傭兵に、その流れを汲んだ甲賀者は各地の大家の家臣、場合によっては忍びにといった具合に、甲賀の人々は、古くからそれぞれが甲賀で蓄えた知識や技術、歴史性を甲賀の外でいかんなく発揮・活用してきたのである。薬や忍びなど、一部は甲賀の代名詞ともなって今に生き続けている。



図 1-13
「ヒト・モノ・情報の行き交う甲賀の地」